四国・水こぼれ話
Water Information Saloon Shikoku
談話室 Vol 83

「大池」と「シラタマモ」

徳島県　牟岐町長
大神（おおが）　憲章（としあき）

四国の東岸、牟岐町の4km沖、太平洋に出羽島（てばじま）（周囲 4km）が浮かんでいる。黒潮の流れに洗われ、温暖で本土より2～3℃暖かく、亜熱帯植物のアコウやハマユウが自生している。野口雨情は「牟岐大漁節」で“春を待たずに豆が咲く”と詠んでいる。

大正時代は、近海･沿岸漁業の基地として栄え「出羽島千人」と言われた時もあったが、今は御多分に洩れず、過疎･老人の島である。

さて、島の西海岸に「大池」と呼ばれる池がある。周囲 100m足らずの小さな池である。大きなゴロゴロ石で海と隔てられ、大潮、満潮時には海水が流れ込んでくる。この浸水した海水に東側の山から淡水が流れ込み、2分の1ほどの「汽水湖」になっている。

この「大池」に「シラタマモ（シャジクモ科）」が自生している。1億数千年前、白亜紀に発生し、海水から淡水へ移行する進行途中の植物である。「シラタマモ」はインド洋モーリシャス島、南太平洋のニューカレドニア、アフリカのリビア海岸などに自生しているといわれ、かつては秋田県の八郎潟にも自生していたが、干拓により絶滅した。出羽島のシラタマモは世界の北限にあたり、極めて稀な自生地と言われる。

「シラタマモ」の形状は20～50cmの藻類で節部に4～8本の小さな枝をつけ、その托葉冠が小枝と対生的につくのを特徴としている。夏にオレンジ色の雄器（造精器）と雌器（造卵器）をつけ、受精すると卵細胞が黒く色づく。また有性生殖の他、仮根部に小球体の無性芽をつくり、白い小さな実をつける。これでシラタマモと名づけられた。昭和47年に国の天然記念物に指定され、保護されている。

一般に「シラタマモ」というと阿寒湖のマリモを連想され、余りにも小粒で、素っ気なく、期待はずれの感があるようである。かつて池にボラを放ち、食べられ絶滅しかかったが、流石、化石といわれるだけあって魚のお腹をくぐり復活。今は見事に繁茂している。近年、オーストラリアの南のウロンゴン湖に自生しているとの報告があった。

わがまち牟岐が世界に誇るご自慢の天然記念物、大池の「シラタマモ」である。

出羽島（てばじま）全景

大池（おおいけ）とゴロゴロ石